

協同組合」が設立されていった。これは地域の雇用創出に大きく貢献することになる。また、これらのビジネスを軌道に乗せるための助言、指導を行うサポート組織「リード(LEED: Local Economic & Enterprise Development)」の貢献も大きい。リードはビジネスアイディアの精査とその後のサポートを行っており、マネー・クレジット・ユニオンはリードの精査とサポートを条件に融資を行っている。

後者は「地域の個人が「自分が他人に提供できるモノやサービス」などを自由にリストアップし、自分が他人に供給できるモノ、あるいは他人から提供してほしいモノを、地域通貨を媒介として地域の人々が交換し合うというもの」であり、1,200人ほどが参加して運営されている。地域通貨制度導入の効果は、①「低所得層を形成する人たちに労働の機会、所得の獲得機会を提供し」、「地域内で生じる労働に対する需要を地域内の人に流すうえで重要な役割を演じている」こと、②地域通貨は口座残高を気にせずにくらでも振り出すことが可能であり、また返済の義務がないので「病気、高齢などの理由で働くことがそもそも困難な人々たちにも生活の術を与えて」おり、福祉政策としても重要な役割を果たしていること、③「すべての人が「価値」のある技術や能力をもっているもの」ということを基本に、地域通貨制度を介して地域社会が地域の人々に対して労働の社会的な役割を保障し、「人としての尊厳」を取り戻すという精神的な貢献も果たしていることの3点にまとめられる。

(お金に意思を持たせるための仕組みをどうつくるか)
お金に「色」はついていない。どのような稼ぎ方をしたとしてもお金はお金である。賄賂で手にしたお金も、競馬で当たったお金も、麻薬密売で得たお金でさえも金融機関に預けられて磁気データに記録されてしまえば全く区別はつかない。また、「色」がついていないお金は常に増殖への衝動に駆られた存在である。フリーターの僅かな普通預金の残高ですら、それは金利を求めて世界を駆け巡るグローバル・マネーの原資となるのである。本来であればお金は人々の幸福につながる

ものであるはずなのに、どこかでボタンの掛け違いがあったのだろうか、一転して人々を不幸にする役回りを引き受けているように見える。こうした性格を持つお金に「色」をつけ(地域密着型の通貨とし)、意思をもたせる(投資先を社会的・倫理的に方向づける)ことでお金本来の役目を取り戻し、グローバル・マネーの暴走を制御し、自らのためにそれを役立てようという取り組みが必要だというのが両氏に共通した主張であり、それこそが「域内経済循環」の本質なのである。

そして、このような仕組みを構築するための基盤となるのが、文字通り「日々の糧」を供給する農林水産業(=1次産業)であり、日常生活に密着した、なくなることのないサービス業(=3次産業)なのである。特に前者は重要である。というのは、ほとんどの生産物は販売を前提として生産されているのに対し、農作物や畜産物、魚介類、それらの加工品は使用価値としての役割は決して失われない「自給」的性格を有しており、それが強いほど販売も「お裾分け」的な性格を帯びることになり、加えて自己雇用という特徴もあり、グローバル・マネーの攪乱に抵抗力があるからである。また、この抵抗力の強さは「域外」からのインプットの大量獲得には向いていないが、逆にそれが期待できない時には自立性を発揮し、僅かな「外貨」のインプットでも大きな効果を生み出すことになるだろう。

どのような地域でも必ずあるのが1次産業であり、その資源を有効に活用し、加工などによって付加価値を高め、さらにはグリーンツーリズムによって「域外」からの「外貨」の調達を図るという一般的な「地域活性化」を超えた、新たな社会実現創出の可能性を1次産業は孕んでいるということになるかもしれない。とはいえ、「お金がなければ生きていけない」ことは確かだ、結局、次の「3」もそうした活性化戦略の域を出るものではない。

3 1次産業を起点とした地域活性化

(地域活性化の起点としての1次産業)

1次産業を支える「地域資源」の最大の特徴は「非